

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成 2 4 年度病害虫発生予報第 1 2 号について
平成 2 4 年度病害虫発生予報第 1 2 号を発表したので送付します。

平成 2 4 年度病害虫発生予報第 1 2 号
向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。
発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
早期水稲	1 いもち病 2 イネミズゾウムシ 3 スクミリンゴガイ		2 2 2
野菜・工芸作物	1 アブラムシ類 2 アザミウマ類、コナジラミ類	並	2
施設野菜全般	1 病害全般		2
冬春きゅうり	1 べと病 2 うどんこ病 3 褐斑病 4 黄化えそ病 5 ミナミキイロアザミウマ 6 タバココナジラミ類	やや多 やや多 やや少 並 やや少	2 3 3 3 3 3
冬春ピーマン	1 うどんこ病 2 斑点病 3 黒枯病 4 アザミウマ類 5 タバココナジラミ類	並 やや多 前年、前々年と同程度 やや多 前年と同程度	4 4 4 4 4
冬春トマト	1 灰色かび病 2 葉かび病 3 タバココナジラミ類 4 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	並 並 やや少 前年より少ない	5 5 5 5
冬春いちご	1 うどんこ病 2 灰色かび病 3 ハダニ類 4 オンシツコナジラミ	並 並 やや多 前年と同程度	5 5 6 6
カンキツ	1 そうか病 2 かいよう病 3 ミカンハダニ	やや少	6 6 6
茶	1 カンザワハダニ	やや多	6

作物の生育状況 (3月中旬)

早期水稲は育苗期から定植期、冬春きゅうり・冬春ピーマン・冬春トマト・冬春いちごは収穫期であった。

4月の気象予報

天気は数日の周期で変わり、平均気温は平年より高い確率 40%、降水量は多い確率 40%、日照時間は平年並の確率 40%と予想されている。

(1 か月予報 鹿児島地方気象台 3月 22日発表)

発生予報の根拠および防除対策

早期水稻

1 いもち病

[防除上の注意]

- (1) 補植用の置き苗は、いもち病の発生源となるので早めに処分する。

2 イネミズゾウムシ

[防除上の注意]

- (1) イネミズゾウムシに効果のある育苗箱施薬剤を使用していない水田では、発生が目立ち始めたら(10株当たり成虫数5頭)直ちに粒剤の水面施用を行う。

3 スクミリンゴガイ

[防除上の注意]

- (1) 用排水路からの侵入を防ぐため、水の出入り口にネットを設置する。
(2) 田植後 2 ~ 3 週間は、できるだけ水深 1 c m 以下の浅水管理とする。但し、低温、寒風時や除草剤散布時は湛水状態を保つ。
(3) 貝の生息が多い場合には、薬剤の本田施用を実施する。

野菜・工芸作物

1 アブラムシ類 (並)

[予報の根拠]

- (1) 黄色水盤トラップによる誘殺状況は、平年とほぼ同様に推移している。

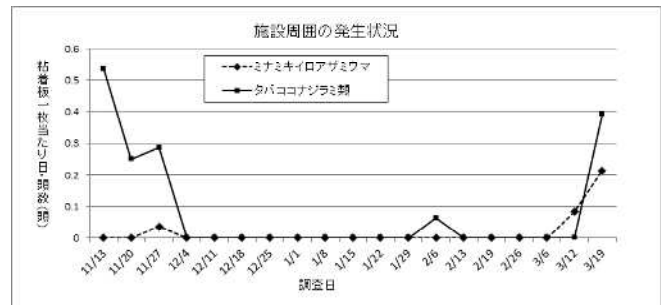
[防除上の注意]

- (1) ウイルス病を媒介するので 早期発見・防除に努める。

2 アザミウマ類、コナジラミ類

[防除上の注意]

- (1) 外気温の上昇に伴い、本虫の露地での活動が活発になってきているため、ハウス開口部のネット被覆やほ場周辺の除草管理、施設栽培終了時における蒸し込みの徹底など、本虫の移動拡散を防止する。
(2) 本虫は、各種ウイルス病を媒介するため、ウイルス病が発生しているほ場では、特に注意が必要である。



施設野菜全般

1 病害全般

今後、気温の上昇に伴い各種病害の発生に好適な条件となるため、気候の変化には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底する。

また、夜温も高めに推移することから、加温機が稼働しない日が多くなり、施設内が多湿になりやすいので、加温機での送風や循環扇を活用する。

きゅうり：べと病、灰色かび病、菌核病、斑点細菌病、褐斑病など

ピーマン：灰色かび病、菌核病、斑点病、黒枯病、軟腐病など

トマト：疫病、灰色かび病、菌核病、葉かび病、すすかび病など

冬春きゅうり

1 ベと病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の巡回調査における発生面積率64.2% (平年46.2%) は平年よりやや多、発病葉率24.7% (平年10.3%) は平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件下で発生しやすく、発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
(2) 窒素切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

2 うどんこ病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率28.5% (平年26.9%) は平年並、発病葉率5.7% (平年3.9%) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。
(2) 薬剤耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
(3) 乾燥時に発生が多くなるので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

3 褐斑病 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率7.1% (平年34.1%)、発病葉率0.1% (平年5.2%) はいずれも平年より少である。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、初期防除を徹底する。
(2) 窒素肥料の多用は、軟弱徒長となるため発病を助長し、逆に少ない場合は草勢低下を招くので、適正な肥培管理に努める。
(3) うどんこ病、べと病の発生後には激発することがあるので、両病害の防除を徹底する。
(4) 摘除した発病葉は、ほ場外に持ち出し処分する。

4 黄化えそ病 (MYSV)

[予報の根拠]

- (1) 3月の巡回調査では発生を確認していないが、普及センターからの報告では前年と同程度の発生となっている。
(発生面積率：前年20.0%、前々年6.3%、発病株率：前年0.1%、前々年0.0%)

[防除上の注意]

- (1) 本病はミナミキイロアザミウマによって永続的に伝搬されるため、発生後は急激には場内に蔓延する恐れがある。ミナミキイロアザミウマの防除対策については、次項を参照のこと。
(2) 感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し、埋却処分するか完全に枯れるまで密封処理する。
(3) 本病と疑われる症状が発生した場合は、西臼杵支庁・農林振興局 (農業改良普及センター) または病害虫防除・肥料検査センターまで連絡する。

5 ミナミキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率50.0% (平年59.0%)、100葉当たり虫数33.7頭 (平年82.2頭) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除する。
(2) 施設内では、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので7日間隔で少なくとも3回の連続防除を行う。
(3) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
(4) 使用薬剤については、地区の防除暦等を参考にするか、西臼杵支庁・各農林振興局 (農業改良普及センター) 等関係機関に問い合わせる。

6 タバココナジラミ類 (ハイタイブB(シムバ-リーフコナジラミ)、ハイタイブQ) (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の巡回調査では発生を認めていない。発生面積率0.0% (平年31.8%)、100葉当たり虫数0.0頭 (平年8.2頭) はいずれも平年より少である。

[防除上の注意]

- (1) 黄色粘着トラップ等を設置し、タバココナジラミ類の早期発見に努めるとともに、栽培期間を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
(2) 効果のある殺虫剤が少ないことから発見したら早めに防除し、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
(3) 施設内外の雑草は、タバココナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
(4) 有効な薬剤に対する抵抗性の発現を回避する観点から、同一系統薬剤の連用は極力避け、ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発現の可能性が低い微生物農薬やコナジラミ類を物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込む。

冬春ピーマン

1 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の巡回調査における発生面積率46.2%(平成59.6%)、発病葉率6.2%(平成7.4%)はいずれも平成並である。

[防除上の注意]

- (1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
(2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。

2 斑点病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率38.5%(平成32.3%)は平成並、発病葉率7.2%(平成2.9%)は平成より多である。

[防除上の注意]

- (1) ハウス内が高温多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。
(2) 病原菌が植物体に侵入した後は防除効果が上がりにくいので、予防散布を行う。

3 黒枯病 (前年、前々年と同程度)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の巡回調査では発生を認めていない。
(発生面積率：前年0.0%、前々年0.0% 発病葉率：前年0.0%、前々年0.0%)

[防除上の注意]

- (1) ほ場内が多湿条件にならないよう、排水に努める。
(2) 発病果・被害茎葉は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し適切に処理する。
(3) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。
(4) 同一薬剤の連用は、薬剤耐性菌の発生を招く恐れがあるので避ける。

4 アザミウマ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬のミナミキイロアザミウマの発生面積率46.2%(平成40.6%)は平成よりやや多、10花当たり寄生虫数1.2頭(平成2.2頭)は平成並、50芯虫数7.2頭(平成2.0頭)は平成より多である。

- (2) ヒラズハナアザミウマの発生面積率61.6%(平成22.2%)、10花当たり寄生虫数20.3頭(平成3.2頭)はいずれも平成より多である。

[防除上の注意]

- (1) ミナミキイロアザミウマの成虫が10花当たり1頭程度寄生すると、販売等級格下げとなる果実が5%発生するので、発見したら早めに防除する。
(2) ミナミキイロアザミウマに対し天敵による防除を実施しているほ場において、ヒラズハナアザミウマの発生が多い傾向にある。生息密度が高まると被害果が発生するので注意が必要であるが、着花数が少なくなった時期に防除すると効果が高まる。
(3) 今後、気温の上昇とともに例年増加していく時期であるので注意する。
(4) 施設内では、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので最少でも7日間隔で3回の連続防除を行い、多発しているときは更に連続した防除を徹底する。
(5) 両アザミウマの薬剤感受性は異なるので、防除の際は使用する農薬に留意する。
(6) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
(7) 被害の激しい茎葉・果実のハウス外への持ち出しや有色粘着板による成虫の捕殺、土中・地表面での蛹化を防止するためのマルチ被覆など、総合的な防除対策を講じる。

5 タバココナジラミ類 (ハ[・]イタイ[°]B(シ^ルハ[・]リ[・]フコナジラミ)、ハ[・]イタイ[°]Q)

(前年より少ない)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率7.7%(前年14.3%、前々年0.0%)は前年より少なく、100葉当たり虫数0.2頭(前年0.2頭、前々年0.0頭)は前年と同程度である。

[防除上の注意]

- (1) 冬春きゅうりのタバココナジラミ類(3ページ)を参照のこと。

冬春トマト

1 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の巡回調査における茎葉での発生面積率40.0% (平年46.6%)、発病株率10.7% (平年8.9%) はいずれも平年並である。
- (2) 果実での発生面積率10.0% (平年29.6%) は平年よりやや少、発病果率0.3% (平年1.9%) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) ハウスの換気に努めるとともに、曇雨天日に防除する場合はくん煙剤を使用する等、ハウス内の湿度が高くなるようにする。
- (2) 発病果・被害茎葉は、伝染源となるのでハウス外に持ち出し処分する。
- (3) 薬剤耐性菌が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

2 葉かび病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率30.0% (平年27.1%) は平年並、発病葉率0.5% (平年4.1%) は平年より少である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- (2) 発病初期の防除を徹底する。

3 タバココナジラミ類(ハ'イタイ' B(シ'ル'パ' -リ'フコ'ジ'ラミ)、ハ'イタイ' Q) (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率20.0% (平年42.6%)、100葉当り虫数0.7頭(平年2.6頭) はいずれも平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 冬春きゅうりのタバココナジラミ類(3ページ)を参照のこと。

4 トマト黄化葉巻病(TYLCV) (前年より少ない)

- (1) 3月中旬の巡回調査では発生を認めていない。
(発生面積率：前年8.3%、前々年0.0%)、発病株率：前年0.1%、前々年0.0%)

[防除上の注意]

- (1) 発病株は伝染源になるので根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので、発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。
- (2) タバココナジラミ類(媒介虫)の防除を徹底する。対策は冬春きゅうりのタバココナジラミ類(3ページ)を参照のこと。

冬春いちご

1 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の巡回調査における葉での発生面積率7.7% (平年32.2%)、発病葉率0.2% (平年2.3%) はいずれも平年より少である。
- (2) 果実での発生面積率23.1% (平年12.5%) は平年よりやや多、発病果率0.3% (平年0.5%) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
- (2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。
- (3) 親株から苗に伝染するので、親株床・育苗時の防除を徹底する。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

2 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率15.4% (平年11.2%) は平年よりやや多、発病果率0.4% (平年0.5%) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、換気に努めるとともに、薬剤散布、灌水にあたっては施設内の空中湿度を高めないように留意する。
- (2) 発病果・被害茎葉は、早めに摘除してほ場内に放置しない。

- (3) 薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

3 ハダニ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率84.7% (平年68.3%)、寄生株率37.5% (平年18.1%) はいずれも平年よりやや多、葉当たり虫数15.3頭(平年2.5頭)は平年より多である。
- [防除上の注意]
- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。
- (2) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。また、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されているので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込む。
- (4) 親株から苗に移行し増殖するので、親株床・育苗時の防除を徹底する。
- (5) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

4 オンシツコナジラミ (前年と同程度)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率30.8% (前年25.0%、前々年7.7%)、葉当たり虫数0.4頭 (前年0.5頭、前々年0.1頭) はいずれも前年と同程度である。
- [防除上の注意]
- (1) 地域により薬剤感受性が低いオンシツコナジラミが確認されているので、地区の普及指導員や技術員の情報を参考にして防除に努める。
- (2) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

カンキツ

1 そうか病

[防除上の注意]

- (1) 越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除する。
- (2) 重点防除時期は、発芽初期・落弁期・幼果期であるが、春葉での感染が多いと開花後果実への感染を抑えることは難しいので、特に発芽初期から展葉期の防除が重要である。

2 かいよう病

[防除上の注意]

- (1) 越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除する。
- (2) 防除は予防散布が原則である。

3 ミカンハダニ (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の発生面積率27.8% (平年38.9%) は平年よりやや少、寄生葉率4.7% (平年9.6%) は平年より少である。
- [防除上の注意]
- (1) 本虫の要防除水準は、寄生葉率30%あるいは葉当たり寄生虫数0.5~1頭である。特に、冬季マシン油乳剤を散布できなかったほ場では発生状況に注意し、要防除水準に達する前の発生初期に防除する。
- (2) 同一薬剤及び同一系統薬剤の使用は年1回が望ましい。

茶

1 カンザワハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の茶樹裾部での発生面積率92.3% (平年67.6%)、寄生葉率11.7% (平年9.2%) はいずれも平年よりやや多である。
- [防除上の注意]
- (1) 一番茶萌芽期以降発生が多い場合には、農薬使用基準の摘採前日数等に注意して防除する。
- (2) ツマグロアオカスミカメとの同時防除の場合は、ダニを主体とした散布量(400%)とする。
- (3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。
宮崎県農薬安全使用啓発ホームページ
<http://nouyaku-tekisei.pref.miyazaki.lg.jp/nouyaku/user/top/miyazaki>
日本植物防疫協会（J P P - N E T：会員専用） <http://www.jpnpn.ne.jp>
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>
農林水産消費安全技術センターホームページ
<http://www.acis.famic.go.jp/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
- 3 発生量（程度）の区分
多 い （高 い） やや多いの外側 10%の度数の入る幅
やや多い （やや高い） 平年並の外側 20%の度数の入る幅
平年並 平年値を中心として 40%の度数の入る幅
やや少ない （やや低い） 平年並の外側 20%の度数の入る幅
少ない （低 い） やや少ないの外側 10%の度数の入る幅
(平年値は過去 10年間の平均)
- 4 予察情報の種類
病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の 5 つです。
(1) 予報・・・向こう 1 か月の発生状況を予測し、毎月 25 日前後に発表する。
(2) 注意報・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
(3) 警報・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
(4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。
(5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ

- 1 花木におけるチャトゲコナジラミの発生確認について
3月上旬、県内のヒサカキの苗においてチャトゲコナジラミが確認されました。本虫は茶にも寄生し、有効な薬剤が少ない難防除害虫ですが、県内の茶においては未確認です。国内ではすでに熊本、大分両県含む 26 府県で発生が確認されています。
防除対策等については、平成 24 年度病害虫発生予察特殊報第 1 号（平成 25 年 3 月 7 日付け）及び「チャの新害虫チャトゲコナジラミの防除マニュアル」（編集ミカントゲコナジラミ（チャトゲコナジラミ）研究推進連絡会（<http://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/gaicyu/siryoku2/index.html>））を参照するとともに、茶園やシキミ・サカキなどの園で本虫を確認したり、すす病を確認した場合は西臼杵支庁・各農林振興局（農業改良普及センター）または病害虫防除・肥料検査センターまで連絡をお願いします。
- 2 病害虫防除・肥料検査センターではホームページで情報を提供しています。ホームページアドレスは<http://www.jpnpn.ne.jp/miyazaki/>です。

【文書取扱】

病害虫防除・肥料検査センター 生頼

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-2127

E-mail: byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp